

『スムージーよ、永遠に』

『スムージーよ、  
永遠に』

上坂京子

【登場人物】

静江 母。元看護士。  
凜子 娘。靴店勤務。  
三宅 ヘルパー。  
佐藤 デイサービス職員。

【場】

抽象化された舞台に、大小の立方体の箱が並んでいる。  
複数の箱は、場面により家具や大型家電になったりする。

凜子の部屋。とあるマンションの一室。

上手にキッチン。冷蔵庫、収納棚。テーブル、椅子など。

舞台中央に窓。時計。

下手にベッド。

その奥にトイレ、風呂、洗面所。

壁には大判のカレンダー。

テーブルの上にはミキサー、カゴに入ったバナナ、充電中のスマホ。

窓の下。床に直置きしているテレビはつけっぱなし。通販番組をやっている。

アラームが鳴る。

しばらくの間鳴り続ける。

凜子、やってくる。

シャワーを浴びていた様子。肩にタオルを掛けている。

スマホを手に取り、アラームを消す。

タオルで髪をこすりながら、画面を見詰める。

カウンターの上にスマホを置く。

冷蔵庫の扉をあけ、中を覗く。

凜子 小松菜、パセリ、ニンジン、

野菜を取り出し、テーブルに置く。

冷蔵庫の扉を閉める。

それらを手早く水洗いし、適当な大きさにザクザク切ってミキサーに入れる。

凜子 水と、

再び冷蔵庫から、水を取り出す。

凜子 それから、

凜子、バナナを手に取り、皮を剥く。  
英語の発音で、

凜子 バナナ。

ミキサーのスイッチを押す。ブォーンと高いモーター音。  
容器一杯に詰め込んだ食材は、あつという間に攪拌されていく。  
その様子を見詰めている凜子。  
なぜだか、少し笑っている。

凜子 深夜の通販番組で衝動買ったミキサーは、久しぶりに当たりだった。真新しいミキサーに数種類の野菜と果物を入れて作った特製ドリンクを朝食として飲む。あとはその日の体調に合わせて選んだサプリメントを副食、いや、命綱として足すのが、私の朝のルーティーンだ。

凜子、鼻歌を歌う。収納棚からグラスを取り出す。  
出来上がったジュースを飲む。

凜子 くーっ。

凜子、グラスをテーブルに置く。  
むし暑い一日。  
手をひらひらさせてみるが、涼しくはならない。  
収納棚から扇子を取り出して仰ぐが、すぐに閉じ、テーブルを叩く。

凜子 パパン。パン。パン。

凜子 さて、忙しい朝にもってこいの、飲めばいいだけの手軽さに加え、美容にも栄養学

的にも良いとされるこの飲み物は、ナチュラル志向の女性の間で火が付き、瞬く間に世間に浸透していった。

再び扇子でパンパンパパン。

凜子 言うたところで、ふん、カラ元気。

凜子、扇子を投げ、溜息。

スマホが鳴る。

凜子 ヤッホー、タケくん。久しぶり、元気やった。

救急車の音。

車のドアが閉まる音。

速足で廊下を歩く音。

凜子 一人暮らしをしていた母が、自宅の階段を踏み外して大怪我をした。同僚に頼んで救急車を呼んでもらい、実家近くの病院に運び込まれてそのまま入院。担当医によると、胸椎と腰椎の骨折、それに持病の肝臓の数値も良くないらしい。

三〇五号室。

静江、ベッドの上で眠っている。

凜子 お母さん……お母さん。

反応がない。

看護師はいないが、いる設定。

凜子、看護師に。

凜子 麻酔ですか？ じゃあ、まだしばらくは。

間。

凜子 私、今の間に着替え取りに実家に行ってきます。

凜子、お辞儀。

静江の家。(凜子の実家)

一階は、六畳の居間と(以下、見えていない)四畳半の台所、二階は六畳二間と  
いう造りの古い一戸建て。

部屋には、座卓、テレビ、ダンスと黒電話、時計、姿見。

凜子、ダンスの引き出しをあける。

紙袋の中に次々と必要な物を入れていく。

凜子 小学四年生の頃から高校を卒業するまで、二人きりでここに住んでいた。

水滴の音。

凜子、作業を止め、体育座りする。

凜子 浮気と金銭問題、トラブル続きだった父との生活に見切りをつけた母は、離婚後、  
それまでの鬱憤をはらすかのように、看護師としてバリバリ働き出した。夜勤に出るの  
も普通で、その間、私はずっと一人でお留守番。寂しかったか寂しくなかったか？ そ  
んなことはもう、忘れてしまった。

若き日の静江が立っている。

夜勤前。出かける準備を終え、凜子を見る。

凜子、寝そべって、テレビを観ている。

静江 凜子。

凜子 んー。

静江 出なくていいから。

凜子 ん？

静江 電話、出んでもいいからね。

凜子 なんでも？

静江 なんでも。

凜子 うーん？

静江 わかった？

凜子 うーん。

静江 じゃ、行くね。

凜子 いってらっしゃい。

静江、出て行く。

二一時。

電話が鳴る。

凜子、起き上がって電話を見る。

リーン、リーン、リーン、リーン、リーン、耳を塞ぐ。

リーン、リーン、リーン、リーン、リーン、鳴りやまない。

凜子、何度か躊躇した後、受話器を取り、耳にあてる。

男 静江さん？

凜子 もしもし。

男 間違えました。

凜子、受話器を置く。

横になり、そのまま眠ってしまふ。

朝。

静江がいる。見慣れない綺麗なワンピース姿。

静江 凜ちゃん、おはよう。

凜子、目を擦る。

凜子 あ、お母さん。

静江 ただいま。留守番おこしやっただね。変わったことなかった？

凜子、身体を起こすが、ぼーっとしたまま。

静江 返事は？

凜子、静江を見る。

凜子 怒らへん？

静江、微笑む。

静江 理由もなしに、怒れへんよ。

凜子、うなづく。

凜子 あんな、電話な、ずっと鳴ってて、もしかしたらお母さんからかかってきたんかなと思つて出たら、「間違えましたって」 って言つて、ガチャつて切れた。

静江 誰？

凜子 知らん。男の人。

静江 あらあら。

静江、笑う。

凜子、不思議そうに静江を見詰める。

静江、凜子の視線に気づき。

静江 え？

凜子 お母さん、何か嬉しそう。

静江 嬉しくなんかないよ、困つた間違え電話やなあ思つただけ。

凜子 ふーん。

静江、再び笑う。

静江 そうそう、これ。

静江、ポケットからヘアピンを取り出す。

静江 おみやげ、忘れんうちに。

凜子 わ。

静江 可愛いやろ？

凜子、うなづく。

静江 つけたげる、こっちおいで。

すり寄る凜子。

静江、凜子の頭を撫で、ヘアピンをつける。

静江 似合ってる。

凜子、立ち上がり、姿見に近づきヘアピンを確認する。  
嬉しそうに振り向いて、静江を見る。

静江も立ち上がり凜子の横に。

両手で、凜子の頬を挟む。

静江 さ、顔洗って。

凜子 うん。

静江 お母さんも着替えんと。今日は仕事お休みやから、凜ちゃんが好きなおかずいっぱい作ってあげる。

静江、鼻歌を歌いながら、去る。

凜子 今思えば、明らかにおかしかった。電話も、母の様子も。仕事帰りには綺麗にセットした髪でめかし込んで、そんな母の姿は子供の目から見ても艶やかで、「困った」って言いつつ、ぜんぜん困った顔をしていなかった。

病院。三〇五号室。

凜子、病室のドアをノックする。

部屋に入る。

静江と目が合う。

静江 仕事抜けて来てくれたんやて？ 悪かったなあ。

凜子 大丈夫なん？

静江 うん。

凜子 ……。

静江 大したことない。

凜子 大したことないことないように見えるけど。

凜子、持ってきた紙袋をベッド脇に置く。

凜子 とりあえずこれ、着替え。

静江 ありがとう。

凜子 いるもんあつたら言うて、また取りにいくから。

返事がない。

凜子 お母さん？

静江、窓側の一点を凝視している。

静江 ああつ、あかん。

凜子 え。

静江 鳥、外から鳥が、早う出さな。

思いがけない言葉に、凜子も反応する。

凜子 え、どこ？ お母さん、どこに鳥がおるん？

静江、窓を指さす。

凜子、近づいて見回すが、外は暗く、何も見えない。

凜子 見えへんけど。

静江、首を傾げる。

凜子、もう一度見てみるが、何も見えない。

静江 おかしいなあ、その入り口でバタバタしてたのに、どこに逃げたんやろ。

静江、しゃべらなくなる。  
目を閉じる。

凜子 麻酔、まだ抜けてなかったん？

凜子、静江の様子を見て、麻酔の影響と判断。

静江、無言のまま。

凜子 一旦帰るな。

静江 ……。

凜子 明日また来る。とりあえず、今日はゆっくり寝て。

凜子、去る。

数日後。夜。凜子の部屋。

テレビの音。

感染症拡大のニュース。

凜子、スマホ片手に会話中。

凜子 面会？

凜子 そんなことになってるん？ さすが首都圏、大変やなあ。あ、さすがってのは、違うか。

凜子、笑う。

凜子 うん一〇分。短いけど、とり合えずこっちは毎日面会できてる。

凜子 え、緩い？ そうかな？ 首都圏が異常なだけなんと違う？ もう何カ月よ。いつになったら解除するん。

凜子、相手の言葉にカチンと。

凜子 棘って、何。

凜子 責めてないやん。タケくんのお家のことなんかこれっぽっちも。キャンセルになったんは、もったいなかったけど。

凜子 だから、そんなこと言うてないし。とにかく明日会うのはなしってことで、そっちがそう決めたんでしょ。だから、尊重してあげてるやん、ええやんそれで、お家第一主義ってことで。

間。

凜子 意味？ 意味なんてないよ。お金ありがとう。前の分はもう振り込んだ。うん、大丈夫、気にせんといて、無理して会ってもらわなくてもいいし、病院行かなあかんし、忙しいから。

凜子 約束してもどうせまた、キャンセルやし。

凜子 ええよ、別に。無理せんでも。

凜子 え、そう。お母さんおつてもええんなら。はい、はい、はい、じゃ、さ・よ・う・な・ら。お子さんお大事にー。

凜子、スマホを切る。

長い間、画面を見詰めている。

病院。三〇五号室。

静江と凜子。

二人の笑い声。

静江 携帯持ってて良かった、お母さん、お蔭で命拾いました。

凜子 あの時はほんまに……びっくりさせんよ、もう。

静江 悪かったなあ。お蔭さんでほら、お母さん命拾いました。

間。

凜子 母は何度も「命拾いました」と言った。興奮気味に話しては笑い、「あかん、骨に響く」とか言いながら笑い続け、笑い止めるとまた、同じ話を繰り返した。

間。

静江 でな、階段を駆け上がろうとして、

凜子 うん。

静江 踊り場一歩手前になったところで身体のバランスを崩して、ひねるみたいにしておちて、横腹をどーん。

凜子、顔を歪める。

凜子 うわっ、そりゃ痛いわ。

静江 そやで、痛すぎて声もでえへんかってんから。でもな、エプロンのポケットに携帯電話を入れていたお蔭で、電話してた職場の子にリダイヤルできて、救急車呼んでもらえて、玄関の鍵も掛けてなかったから、救急隊員さんらにもささーっと家の中に入ってもらって、

凜子 嘘。

静江 嘘違うよ、ほんま、ほんま。

凜子 恐わ。

静江 そうや。だから、あんたも気いつけんと。

凜子 違うやん、気いつけなあかんのは、お母さん。

静江 あんなあ、凜子、起こってしもたことはしやーないの。

凜子 でた、開き直り。

静江、聞いている。

静江 お母さんは、生かされたんやー。

無邪気に笑う静江。

凜子 ツッコミどころ満載やん。その時もし頭打ってたら？ 動けへんまま誰にも連絡できずに放置されてたら？ そもそも、戸締りしてないなんてどういうこと？ 不用心すぎ、年のことも考えずに慌てて階段を駆け上がるのもどうかと思うよ、ほんま、気いつけてもらわんと。

静江、聞いている。

凜子 でも、まあ、良かった。

間。

凜子 そう思えたのはほんの一瞬、やったけど。

一か月後。

凜子 入院中、母は腰を固定するため特製のコルセットをきつく巻いて、なるべく動かないようにして横たわっていた。同時に肝臓治療のための飲み薬を飲み、何本もの点滴薬を受け続けた。治療しているはずなのに、母は日が経つにつれ、元気を無くしていくように見えた。そしてある日、

看護師はいないが、いる設定。

凜子 面会謝絶って、そんな。もう、入れられへんですか？ 緊急事態宣言で？ いつまで？

病院入口。専用受付。

凜子、じっと立っている。

看護師に着替えが入った袋を渡し、汚れものが入った袋を受け取る。

凜子 お世話になってます。どうですか、母の様子は？ 熱は？ え、また下痢？ そうなんです。これ、母が好きなゼリーなんです。食べられるかどうかわかりませんが、少しでも。よろしく願います。

凜子 厳戒態勢の病院で、人を介して母の荷物の受け渡しを行う。感染リスクを考えるとしかたないことだとわかっている。母と直接会えないことは苦痛だった。心細いだろう母の気持ちを思うといたたまれない。そんな思いを心の中に押し込んで過ごした。誰かに伝えたところで、どうにもならない。院内にいるスタッフは今日も皆さん、忙しそうだ。

雨の音。

病院入口に立つ凜子。

小走りでやってきた看護師に、おむつパックと紙袋を渡し、汚れものが入った袋を受け取る。

凜子 あの、母は？ 血圧？ 熱も？ そうですか、何かあったら連絡を、引き続きよろしく願います。

凜子、去っていく看護師に向かってお辞儀する、お辞儀する、お辞儀する

凜子 数か月待ってようやく、病院から、「週一回の面会を再開します」と連絡が入った。

三〇五号室。

静江の姿を見て、ぎよっとする凜子。

悟られないよう注意しながら、ベッドに近づく。

小さく手を挙げ、

凜子 ヤッホー、お母さん。

静江、力なく。

静江 来てくれたんか？ 凜…。

声小さすぎて、よく聞き取れない。

凜子、静江の手を握り、さする。

凜子 長いこと顔見てなかったけど、思ったより元気そうやん。

静江 痩せたやろ、きつい薬ばかりで、お腹くだしてもうて。

凜子 そうやったん。その分いっぱいご飯食べんと。

時間経過。

凜子 ふくよかだった母の体は急速に萎んでしまっていた。全身の筋肉が落ち、骨ばかりが目立つようになった。体力もかなり落ちてきているようだ。痛み止めの薬を飲んだり、貼ったりしても角度によって激痛が走るらしく、立ったり座ったりという動作をするのもハアハアと荒い呼吸をし、とてもキツそうに見えた。でも、そんなことより、何よりも、母の元に度々あの鳥がやって来るようになったことが一番の問題かもしれない。入院初日からずっと、最初は時々、そして段々頻度が増え、時には深夜、それが早朝、鳥が飛んで来ては激しく鳴き続ける。さらにその後、亡くなったはずの祖母、伯父や伯母、いとこたちが、入れ替わり立ち代わりひっきりなしにやって来るのだと母は言う。不思議なことに母には怖さがなく、ここのとこ頻繁にやって来た懐かしい人たちと普通に会話しているようだった。

数日後。三〇五号室。

鳥の鳴き声。

凜子 今日、どない？

静江 うん、いつもよりはマシ。また鳥おった。あっちの方。

凜子 夢やないん？

静江 いいや。

凜子 どんな感じで見えるん？

静江 見た目は普通に見えるねんけど、そういえばみんなちよつと全体的に薄う見えるなあ。

ざわざわと人の声。

凜子 幻覚として片づけるには頻度が多すぎるし、母の元にやってくるのは故人ばかり。

そして、彼らの訪問を合図する謎の鳥。怪しい。怪しすぎるし、怖すぎる。

凜子、震えながら。

凜子 死の淵に引きずり込まれようとしていたりして？ それか、あの世からの使者か何か？

凜子 怖い、怖い、怖い。母の衰弱と比例して起こっているように思える現象は不吉でしかなく、私の心を何度もざわつかせた。

次の面会日。

静江、ベッドの上で、虚ろな様子で天井を見ている。

凜子、片手を挙げ、

凜子 ヤッホー、お母さん。

ベッドに近づき、静江の額にかかる髪を撫でる。

凜子 調子どう？ 食欲は？ マシになった？

静江 母さんなあ、痛い、もう一生治れへんねんて。

凜子 え？

静江 治れへんて、言われた。

凜子 誰がそんな。

静江 先生。

凜子 嘘。

静江、首を振り、

静江 嘘やない。先生に痛みを取る方法教えて言うたら、「そりや、死ぬまで無理ですなあ」  
つて。「こんなキツいんが続けるのはもうかなわん。それやったら、はよう死なせて」言う  
たら、先生笑って出て行きはった。

凜子 いつの間にそんな。

静江 朝、ふらーつと来て、それだけ言うて、さーつと。

凜子 そんなん、無視、無視。

静江 でも。

凜子 流しといたらええねん。

静江 帰りたい。

凜子 うん、帰ろ。

静江 いつ？

凜子 もうちよつとしたら。

静江 今。

凜子 今は無理。

静江 行こ、ここ出て、二人で暮らそう。な、凜子。

静江、凜子の腕を掴む。

静江 なあて。

凜子 わかった、お母さん、わかったから。

静江、急に怒り出す。

静江 鬼か、鬼、もうええ、どいつもこいつも。いね（帰れ）しばくぞ。ぼけ、カス……  
役立たず、いね、まだいなんのか、いなんのやったら、すぐ死ね、はよ死にさせこの  
やろう……できそこない、できそこないのお前のかーちゃん、でべそ……。

静江、支離滅裂な暴言を吐き出す。

凜子 お母さん。

凜子、茫然と。

夜。凜子の部屋。

凜子、テーブルに突っ伏している。

傍には、空いた酒瓶とグラス。

若き日の静江が立っている。

グラスを手に取り、液体を注ぐ。

凜子は小学四年生。

静江 ほら。

凜子 何、これ。

静江 お母さん特製の野菜ジュース、この間買ったミキサー。あれで作ってみてん、飲んでみ。

凜子 えー、めっちゃ色濃い。

凜子、飲まない。

静江 飲んでみて、美味しいから。

凜子 ……。

静江 ほーら。

凜子、嫌々一口。

凜子 うえっ。

顔をしかめる。

凜子 草、草、草、草、ぺんぺん草みたいな味がする。

静江 あんた、嘘言いなや、ぺんぺん草なんか噛んだことないくせに。

凜子 あるもん、噛んだもん。

静江 生で？ あんたは牛か、牛なんか。そんなん自慢にも何にもならへん。

凜子、頬を膨らませる。

静江 ちゃんと飲んで、身体にええねんから。

凜子 誰が言うたん？

静江、胸を張り。

静江 お母さん。

凜子 何それー。

静江 大丈夫、大丈夫。お母さんの勘は当たるんやから。

凜子、グラスを持ったまま、逃げようとする。

凜子 嫌やー。

静江 いらんのかな？ おやつ。

凜子 ずるい。

凜子、しぶしぶグラスに口をつける。

凜子 それで済んだと思ったのに、次の日もまた似たような飲み物を手渡された。その次の日も、また次の日も。

凜子、飲み残しのグラスを持ち上げ、一口。

凜子 あれからずーっと、これ飲んでばっかし。

凜子、思い出し笑い。

凜子 勘って何？ ぜんぜん説得力ない。強引、滅茶苦茶、支離滅裂。

間。

凜子 ある日、ちよつとした反抗心から、わざと野菜ジュースを飲み残し、友たちの家に出かけたことがあった。すっかり忘れて遊び呆け、夕方になり家に帰ると、野菜ジュースはそのままの状態でちやぶ台の真ん中に置かれていた。都合のいいことに母は台所立ち、こちらを背に野菜を刻んでいた。

静江の背中。トントんと野菜を刻む音。

凜子、グラス持ったまま突っ立っている。

凜子（心の声） 捨てるんなら今。

凜子（心の声） 捨てるんなら今やよ。

凜子（心の声） 捨てるんやったら、今しかない。

凜子、静江を見る。

葛藤の後、覆っていたラップをはずし、グラスの底を持ち上げる。

粘り気が多い液体は時間経過とともに固まっていてなかなか落ちてこない。

凜子、グラスの底を叩く。

トントン、トントン、トントン。

凜子 何回か目に草っぽい味の塊がごぼっと口の中に落ちて来た。ぬるくてぬめぬめした食感が私の喉の奥を刺激した。

凜子 おえ。

凜子、苦い顔。口をぬぐう。

あたり暗くなる。

凜子 完全なる敗北。その日私は放置してからこれを飲むと中身が分離してさらにまずくなることを学んだ。お母さんの言うことは絶対や、無駄な抵抗はせん方がええなと悟ったのもその時からだった。

静江、勝ち誇った顔で笑う。

静江 なーっ、お母さんが言うた通りやろ。

凜子 同種の飲み物が今なおまあまあ人気らしいと知ってから、母は余計にそんな顔をするようになった。確かに母の読みは鋭かった。材料の選び方から作り方まで、母の野菜ジュースそっくりの飲み物は、時代の移り変わりと共に、いつの間にかスムージーだなんて小洒落た名前で呼ばれるようになっていた。

さらに数日後。

静江の家。

帰ってきた静江。

様子を見に来た凜子。

ヘルパーの三宅。

三人ともマスクをつけている。

部屋の片隅にアルコール除菌液。

凜子、ワンプッシュして手の平に取り擦る。

凜子 結局、母は半年以上かかって退院した。こんなご時世に長期入院できたのは母くらいで、「特例中の特例ですからね」と担当医から何度も恩着せがましい言い方をされて、うっとおしかった。

凜子、少し歩く。

立ち止まる。

凜子 母は認知症なのだそう。確定したのは一週間前。悔やんでも悔やみきれない空白の時間。面会許可がおりて、再会できた時にはもうすでに別人みたいになっていて、境目の時期はいつ頃だったのか？とか、あれだけの変化になぜ気づいてもらなかったのか？とか、見て見ぬふりされてしまったんか？とか、そんなことばかりが気になった。診断が遅れたことについて、病院側からの謝罪はなかった、説明すらなくてびっくりした。ただ唐突に退院の時期について考えておいて欲しいと言われただけ。ベッドの数が足りないそう。感染症拡大の話はニュースで観て知っていた。重症患者に譲らなきゃ、と思っただけだけど、今思えば、ただ厄介払いされただけかもしれない。

凜子、そっぽを向く。

ぐっと一回背伸びしてから、前を向く。

凜子 退院が決まると、担当医からはもちろん、看護師やケースワーカーからも、病院に所属するケアマネージャーをつけるよう何度もしつこく言われ続けた。けど私は、「はい」とは言いたくなくて、絶対に言いたくなくて。だからといって抗議する気にもなれず、知り合いの事業所があるのでと告げて断った。すると、病院側の対応はさらに適当になり、必要最低限と思われる情報さえもこちらから切り出さない限り何も言ってくれなくなつた。

間。

凜子 酷い話。でも、あそこまであからさまだと、かえって吹っ切れる。私は役所に相談し、デイサービスやヘルパー派遣をとりまとめている地域包括支援センターなる場所を紹介してもらった。介護認定を申請すると同時に、介護サービス全般のコーディネーターをしてくれるケアマネージャーを紹介してもらい、必要な介護プランを立ててもらった。ところが、通知結果は、「要介護2」現状よりかなり低い判定が出ってしまった。

凜子 なんか？ 認定時に母は、これもできます、あれもできますと、大丈夫アピールをしてしまったらしい。

三宅がいる。

座って、洗濯物を畳んでいる。

三宅 そういう人、多いみたいですよ。

凜子 そうなんですか？

三宅、うなづく。

三宅 頑張ろうって気持ちに仇になって、そのせいで大変な目に遭ってる人たち、今まで何人も見てきましたから。

間。

静江 ああああーっ、あああーっ。

静江、叫び出す。

静江 また、あの鳥がこっちに飛んで来た。なんでか知らんけどじつとこっち見てる。

三宅、静江に合わせ話しかける

三宅 あら、ほんま。鳥どつから飛んで来たんやろね。でも、突いてくるわけやし、放っておいたらいいんと違いますか。それか、あっち側の窓をちよつと開けて、逃がします？

凜子、二人のやりとりをみて。

凜子 さすが、三宅さん。

凜子 そういえば一昨日、連絡ノートに、「最近、鳥が入ってくると言って母が窓を開けさせてくれません」と書いたのだ。三宅さんはあれを読んで機転を効かせてくれたに違いなかった。さすがプロは違う。声掛け一つとってもぜんぜん違う。

間。

静江 そやな。じゃあ、あっちの窓開けて貰おうか。

三宅、窓を開ける。

見えない鳥に向かって、追い立てるフリをする。

三宅 ほれほれ、早うお逃げ。

三宅 どうです、静江さん。こんなんです。

静江、右手の親指と人差し指でOKサインを作る。

静江 それでいい。それだけ開けてもろたら、鳥も出て行きやすいやろ。

三宅 じゃ、しばらくこのままにしときましようか？ 鳥が出ていったら、私すぐに網戸閉めますから、ここってタイミングが来たら言うてくださいね。

静江、茶目っ気を出して笑う。

無言のまま再び指でOKサインを出す。

三宅 静江さんったら、もう。

三宅、吹き出す。

風が吹く。

重く澱んでいた空気がすつと抜けていく。

心地よい風はさりげなく、涼やかな秋の到来を告げていた。

三宅 気持ちいい風。

窓際に立つ三宅。

眩しそうに目を細めながら空を見上げる。

静江 ああ。

鳥が羽ばたく音。

凜子 例の鳥は、ようやくどこかに飛んでいったら良かった。三宅さんが、早くもなく、遅くもない絶妙なタイミングで、

三宅 静江さん、網戸閉めますね。

静江 うん、そやな。ええ風吹いてきてるから、窓はまだもうちょっと開けとこか。

静江 風を受けながらくつろいだ様子。

気持ち良さそうに目をつむり、寝息をたて始める。

三宅、凜子に向けて目くばせする。

うんうんとうなずく凜子。

と、突然静江の腹の虫がキュルキュルと鳴った。

吹き出すのを堪える三宅の顔。

凜子も笑う。

二人、笑いながら手のひらでバシバシお互いの体を叩き合う。

夜。

凜子の部屋。

眠っている凜子。

若き日の静江と男のシルエットが浮かぶ。

静江（声のみ） 一緒に行くなんか無理。この子には、私が。だから、私ら今日でおしまい。

シルエット、消える。

朝。

凜子、目を覚ます。

疲れた様子。顔をパンパンと叩く。

凜子、ミキサーの容器とグラスを洗って流し台に置く。

凜子 あ。

近づいてもう一度カレンダーを見る。数字の下にうっすらと引かれた野線を指で追う。

凜子 「金曜九時〜十七時 デイサービス、見送りと出迎え」

スマホを見る。

凜子 あかん。

凜子、走り出す。

静江の家。

凜子、到着。

凜子 月曜と金曜の九時から五時まで、母は週二回のペースで「あすなるデイサービス」に出かけるようになった。骨折以降、自宅の風呂に入れなくなったため、ケアマネージャーから、寝たままの姿勢で入浴できるシステムを取り入れているというこの施設を紹介してもらったのだ。朝、職員が迎えに来てくれ、あちらで風呂に入れてもらい、食事をし、歌や体操、料理やクラフトなどのレクレーションをし、送り届けてもらう。しかも結構な頻度でクッキーやらお花やらおみやげまで貰ってくる。至れり尽くせりだ。デイサービスって、高齢者が入る保育所のようなイメージを持っていただけ、いい意味で裏切られた感があった。月一ペースの病院通いの大変さ、いちいち引かかる物言いをする担当医とのやりとりに比べたら、それは、もう。

間。

凜子 あすなるデイサービスのスタッフたちは皆、母に優しい。毎回、迎えに来るたびに母に向かって、静江さん、静江さんと口々に声を掛けて連れていってくれる介護職員のお兄さんやお姉さん、といっても私よりうんと年下だけど、あの人の良さそうな笑顔に触れられるだけでも値打ちがあると思っっている。

回想。

佐藤 静江さん。

佐藤、両手を広げて登場。

静江 ああ、佐藤ちゃん。

佐藤、静江に近づく。

ハグする二人。

凜子 最初から、何かと目立っていたのが佐藤さん。大学卒業後、福祉専門学校に入り直し卒業したばかりの新人さんらしい。色白で睫毛が長くパッチリとした二重目。規定に引つ掛からない程度の前髪長めなヘアスタイルを保っている。見ようによつては、健康的なホストのお兄ちゃん、という印象。よく母に冗談を言つて笑わせている。母はこの佐藤さんのことを特に気に入っているようだ。

佐藤と並び、笑顔でピースする静江。

車椅子越しに、無理やり腕を組んでご満悦。

二人して楽しそうに会話している。

静江 佐藤ちゃんな、何かいい匂いするねん。

凜子 そうと聞いて何気なく観察していたら、そういえば佐藤さんは握手したり、ハグしたり、耳打ちしたり、結構ボディタッチが多いタイプなんだと気がついた。母は喜んでみるみたいだけど、このご時世に？ ソーシャルディスタンスは？ 大丈夫なんだろう  
か？

時間経過。

静江の家。

車のドアが閉まる音。

静江 ただいま。

凜子 (静江に) おかえり。(佐藤に) ありがとうございます。

佐藤 (凜子に) お疲れ様です。(静江に) じゃ、静江さん、また。

静江 え、佐藤ちゃん、もう帰るんか？ ちょっと上がつてお茶でも。

佐藤、回り込んで静江の前でひざまずき、両手で静江の手を包む。

佐藤 そうしたいところなんです、他の方を送りにいかないと駄目なので。また、今度、お迎えに来ますから。

静江 そうか。残念やけど、またな。

佐藤 静江さん。失礼しますね。

凜子 ありがとうございます。

凜子、佐藤に向かっておじぎする。

凜子 もともと母は彼のようなタイプが好きなんだと思う。佐藤さんの顔立ちは、どこことなく別れた父と系統が似ている気がした。基本的に母は面食いで、父のこともきつと、顔が好きで結婚したのだ。

間。

凜子 母がなぜあんなにも相性が悪かった父と結婚してしまったのか、子供の頃から、ずっと不思議に思っていた。母に聞いたことはないし、離婚後すぐに死んでしまった父にも確かめる術はないけど、絶対にそうだと思う。

佐藤、静江に何か告げる。

凜子、はしやぎ声をあげて、笑う。

佐藤、去る。

凜子 やっぱり。

朝。静江の家。

マスク姿の凜子、出勤前に立ち寄った。

手に消毒液をつける。

普段通りに話しかけるが、静江、よそよそしい。

静江 おはようございます。今日もええお天気で。そろそろ、身支度せんとお迎えの車が。

凜子 おはよう、お母さん。デイサービスの日、よう覚えてたね。偉いらい。

静江 はい、どうも。

凜子 それはそうと、ほら、知ってた？ お母さんが作ってくれた野菜ジュース。あれ、今になって流行りだして、みんな、飲んでるねんて。

静江 はあ。

凜子 体にいいって評判らしいわ。この前テレビで特集してた。

静江 そうですか。

凜子 飲んでみる？ 今から作るから。

凜子、マスクをとる。

凜子 いずれ話に食いついてくることを見越して、話を振る。母は、一瞬怪訝そうな顔をするが、話しているうちに徐々に元気を取り戻す。得意げにな顔で、「ほれみてみ」とお決まりのフレーズが出たらしめたもの。調子が良い証拠だ。そんな日は食もすすみ、一日を通して比較的調子良く過ごせるのだ。

静江、凜子の顔を見詰め。

静江 あれ、あんた凜子か？

凜子 嫌やわあ、お母さん、誰や思ってたん？

静江 どこぞの誰それさんが来てはるなあ思ってた。あかんわ、年いくと目えがほんま悪うなってしまう。

凜子 もう。目のせいにしたりして。

凜子、笑う。

凜子、何もかもがまだらで、こんな調子。特に、最近の記憶は、どれもこれも怪しいのだけれど、昔のことはばっちり覚えてる母は得意顔なまま、やがてジュースづくりのコツについてしゃべり出す。私は相槌を打ちながら、検温を済ませて、血圧測定して、出た数値を記録ノートに記入する。続いて、前の日の夜のヘルパーさんが書いてくれた伝達事項にもさっと目を通して認め印を押す。さらに、おむつが汚れてないか確認して、手を洗い、キッチンへ移動し、今度は母のための朝食作りに取り掛かる。

パンが焼けた音。

ミキサーが回る音。

凜子、盆を用意し、静江の元に朝食を運ぶ。

凜子 朝はだいたいパン食。トースト、スクランブルエッグやプレーンオムレツを作り、サラダ、牛乳を運んでテーブルに並べる。あとは、母にもスムージー。少量なのは、肝臓だけでなく、腎臓の状態も良くないから。担当医から一日の水分量を1000ccに抑えるよう指示されていた。

静江、ベッドの上からテレビを見ている。

凜子 朝食の準備が調ったら、母の体を支えながらベッドの上部を起こす。クッションがわりにバスタオルを軽く丸めたものを母の腰に当てて負担がかからない角度に調節するのだ。

凜子、静江の腰に丸めたタオルを当てる。

凜子 痛い？

静江 うん

凜子 これは？

静江 痛い。

凜子 こうしたら？

間。

凜子 母が大丈夫と言うまで微調整を繰り返す。座る位置が固定したところで、汚れ防止のためのエプロンをかけ、おしぼりを渡す。手をしっかり拭いたところで、

二人並んで両手を合わせる。

静江・凜子 いただきます。

凜子 母が食事をしている間に、デイサービスへ行くための準備。

凜子、大きなバッグに荷物を入れていく。

凜子 着替え一式とバスタオル、小さいタオルを何枚か、コップ、歯磨きセット。ビニール袋、連絡用ノート、室内履き、紙おむつ一式、薬、これでよし。

凜子 食事を済ませた後は、服薬だ。朝昼晩と薬の種類が若干変わる。間違えないよう、曜日ごとにあらかじめ仕分けておいたものを取り出し、その都度母に渡す。

凜子、静江に薬と水を渡す。  
静江、飲む。

凜子 はい。

凜子、静江に歯ブラシを渡し、洗面器を持って待機。  
静江、真面目腐った様子で歯を磨く。

凜子 ちゃんと磨いてるやん。

静江 うん。

凜子 えらいなあ、お母さん。

静江 うん。

凜子、静江にコップを渡す。  
静江、洗面器に向かって口に含んだ水を吐きだす。  
タオルで顔を拭く。

凜子 綺麗になったな、お母さん。

静江 うん。

凜子 続いて、トイレ誘導。これが一番大変で気が抜けない。まずは、座った状態から体を回転させ、母をいったんベッドに腰掛けさせる。続いて体の側まで歩行器を引き寄せ、て手すりを捕まらせる。掛け声と一緒に。

静江・凜子 セーの。

静江、立ち上がる。筋力が落ちているせいで、ぐにやぐにやと身体が揺れてしま  
う。

凜子、静江の身体を必死に支える。

凜子 うーっ、人って字の実写版。

静江 え、何？

凜子 いや、ほら、お母さん行くよ、セーの。

一、二、一、二、と、二人して声を出しながら、一歩ずつトイレ方向に移動して

いく。

凜子、静江、トイレに消える。ほどなくして出てくる。

二人して再び力を合わせ、ベッドに戻る。

凜子、静江の服を脱がせる。あらかじめ沸かしておいた湯を洗面器に移し、体を拭く。

凜子 豊満だった母の胸は見る影もなく萎んで、今では乳頭のみがそこにあるというくらい平だ。肌の潤いも減り、すぐにカサカサになる。乾燥したままだと痒がるので、拭いた後は必ず薬用クリームを塗る。それが終わると、外出用の服に着替え、最後に髪を梳かし、顔にもちよんちよんと化粧クリームをつけて、マスクもつけて、ようやくデイサービスへ行く準備が整う。

間。

凜子 ただし、この一連の流れはうまくいった時バージョン。腰の痛みが激しい時は、こうはいかない。ベッドからトイレまではたかだか十歩くらいの距離なのに、駄目な時はもう本当に駄目で……。

静江 ああああーっ。

静江、ベッドに仰向けになっている。

凜子、使い捨てのビニール手袋をつける。

空の台所洗剤の容器に湯を入れる。

静江 ああああーっ。

静江、ベッドの柵に掴まり顔を歪ませ、呻いている。

凜子 ごめん、お母さん。膝立てられる？ おしり、洗つところか。

凜子、痛そうに膝を立てている静江に近づく。おむつを取り、股めがけて容器の湯をかける。

静江、ぎゃーと叫ぶ。首を振り、暴れる。

静江 熱いー、痛いー。

凜子、手を止める。苦笑しながら、

凜子 熱いん？ 痛いん？ どっちなん？

もう一度、容器の湯をかける。

静江 熱いー。熱いよー、あーん、あーん、お母さん、お母さん、お母さんー。

凜子 加減してるのに、なんで？

凜子、手で湯をすくう。静江の手に少しかける。

凜子 ほら、熱ない。熱ないやろ。もう一回だけ。

静江、子供みたいに泣く。

凜子 泣かない、泣かない。水は冷たいし、お湯やないと、綺麗にならんですよ。

凜子、濡れた下半身をタオルで拭く。汚れたおむつを丸める。新しいおむつをつける。

凜子 はい、おしまい。上手やったよ、お母さん。

かぶせるように排便の音。

凜子 今の何？

静江 うんこ。

間。

凜子 わかってるわ、そんなん。

凜子、手にした容器を投げる。

凜子 なんで？

静江 ……。

凜子 なんて、おむつ替える前に言わへんの？

凜子、静江を睨みつける。

静江、布団をかぶろうとする。

凜子 やめて。

凜子 (布団) 汚れるやんか。

凜子、布団をはね除け、ため息。

凜子 また一から。

凜子、荒っぽい手つきで、替えたばかりのおむつのテープを外す。

静江、泣く。

凜子 泣きな。

泣き続ける静江。

凜子 こっちの方が泣きたいわ。

最寄り駅近くの繁華街。

「通りやんせ」のメロディーが流れている。

凜子、リュックサックを背負っている。

歩き、立ち止まる。

凜子 え？

凜子、振り返る。

佐藤がいる。

凜子 先週の土曜日、さりげないボディタッチが得意な、イケメンの佐藤さんからいきなり声を掛けられた。

佐藤、挨拶もなく。

佐藤 そのリュック、L a k i のでしょ。

と、笑う。

驚く、凜子。警戒した様子で。

凜子 そうですけど。

佐藤、身体をひねり、自分が背負っているリュックをアピールしてみせる。

凜子、つつい反応して。

凜子 あ。

佐藤 ねーっ。僕も、白石さんと色違い。

凜子 ほんと。

佐藤 この鞆、テレビドラマの小道具とかでも使われているんですよ。いいなあ、欲しいなあ、と思って調べて買ったのが最初で。

凜子 ああ、ブリーフケース。ドラマに出ていた俳優が気に入って、撮影後にわざわざ買い取りしたって、あれ。

佐藤 そう。僕、すっかり気に入っちゃって。他のも何個かオーダーしたんです。

凜子 ありがとうございます。私、その店で働いていて、今から出勤。

佐藤 僕、今日は仕事休みで。メンテナンスで今から店に向かうところ。

凜子・佐藤 ええっ。

頭を掻く佐藤。

二人歩き出す。

凜子 デイサービスの送迎時に会う程度の付き合いしかない相手とおそろいのリュックを背負って、施設から遠く離れた繁華街を並んで歩くことになるなんて。でもせつかくなので、歩きながら佐藤さんのことをそれとなく観察させてもらおう。地味な印象の制服に身を包んでも十分に格好いい佐藤さんだけど、私服だとさらにイケメン度が増す。でも、白と黒のチェックのシャツにベージュのチノパンというシンプルな服装は意外だった。勝手にホストのお兄さん路線で想像していたからか、何か物足りない気がしてしまう。もっと冒険したらいいのに。モノトーンで決めるとか、尖がった靴を履いてみる

とか。

間。

凜子 んー、いい香り。香水？ それとも柔軟剤？ どっち？

歩き続ける二人。

凜子 いかん、いかん、せっかく若いイケメン君と歩いているというのに、どうでもいいことしか浮かんでこない。無言のまま歩いていたら、横断歩道の前に出た。ああ、赤。タイミング悪っ、ここの信号待ち時間長すぎるし。

二人、立ち止まる。

佐藤 僕ね、静江さんに、「うちに来たらええ」って誘われているんですよ。

凜子 え。

固まる凜子。

歩行を告げる、「通りゃんせ」のメロディー。

凜子 あの、ごめんなさい、今なんて？

佐藤、微笑みながら、

佐藤 「一緒に暮らしたらええやん」と誘っていただいたんです、静江さんに。

凜子、は？という顔。

佐藤 静江さんは、困っている僕を助けようとしているだけで。純粋な好意からそう言うてくれたみたいなんですけど。

佐藤、笑う。

凜子、笑わない。

佐藤、先を歩く。

凜子、無言のまま、後続く。

帰りの電車。

凜子、佐藤、二人並んで座っている。

列車が揺れる音。

佐藤、神妙な顔で。

佐藤 友人が結婚することになって、シェアしていたマンション、引き払うことになって。

リノベーションして二人の新居にするとかで。

凜子 それで引っ越しを？

佐藤 ええ、出来るだけ早く。今まで住まわせてくれた友人には感謝しているので。

凜子 わかります。でも、なんで家に？

佐藤 世間話のつもりで話したら、静江さんが、

凜子 おいでって？

佐藤 ええ、まあ。

言葉を濁す佐藤。

チラチラと凜子を見る。

凜子 そのマンションって、いつまで？

佐藤 来月いっぱい、と思っただけなんです。

凜子、佐藤の言葉にかぶせるように。

凜子 ご存じですよ。

佐藤 え。

凜子 認知症だって。

佐藤 えーっと。

凜子 つまり母の言葉には何の効力も発生しない。それを知っていて、その上でこの話をされてるってことでよろしいんですよ。

佐藤、姿勢を直す。

佐藤 実家とかに頼れたらいいんですが、両親はもういないし。兄弟は遠方だしで困って  
いまして。厚かましい話だということにはわかっています。でも、お願いしたくて。半年、

いや三カ月だけでもいいんです。ご実家の空部屋を貸していただけませんか？ もちろん、タダでとは言いません。静江さんのこともお手伝いさせていただくつもりです。

頭を下げる、佐藤。

凜子、小さな声で、

凜子 たらしか。

決めきれない様子で、爪を噛む。  
間。

凜子 あの。

佐藤、顔を上げる。

佐藤 はい？

凜子 明日、もう一度実家で話しましよ、母と、三人で。

佐藤 よろしくお願いします。

何を勘違いしたのか、佐藤、とびっきりの笑顔を見せる。

翌日。静江の家。

テレビの音。静江が好きなバラエティ番組。

凜子、りんごの皮をむいている。

静江 いらっしやい。

佐藤 お邪魔します。

上機嫌の静江。

静江 さつ、さつ、上がってあがって、そこ、座って。

凜子、ナイフを持ったまま二人の様子を伺う。

静江 凜ちゃん、お茶。

凜子、リンゴの皮をむき続ける。

静江 (佐藤に) ここに来たら、遠慮したらあかんねんで。(凜子に) 凜ちゃん、リンゴの皮むいたら、お茶とお菓子の用意もな。

凜子、無言。黙々と手を動かす。

静江、凜子に指図して運ばせたお茶、菓子、果物を佐藤に勧める。

佐藤 へえ。ここが静江さんのお部屋なんですね、いいですね。何か落ち着く。

静江 そうか、落ち着くかあ。

静江、笑う。

凜子 お母さん。

しっかりし過ぎている。

今までのあれは何だったのかと、戸惑う、凜子。

静江 佐藤ちゃん、あとで二階見といで、手前があんたの部屋やから。

佐藤 ありがとうございます。

佐藤、遠慮せず出されたリンゴを頬張りながら、バラエティー番組を観る。

佐藤 この人が作った料理旨そう。でも僕ならこれにオイスターソースを足しますね。隠し味に。

静江 ああ、それもええなあ。

佐藤、静江、顔を見合わせ、何度も笑う。

凜子 やがて母は、病歴自慢をしはじめた。

静江 骨折して、慢性肝炎になって、心臓病やってな、脳梗塞の手術もやって、麻酔が合わなくて、途中で心臓止まって、何度も死にかけて……。

凜子、笑う。

凜子 お母さん、腰の話はしてあげへんの？  
静江 ……。

静江、痛みが減って忘れていいのか、腰のことはまったく言わず、気を引きたい様子で、罹ってもいない病名ばかり口にする。

凜子、佐藤に向かって無言で「違う」と首を振る。

佐藤、静江の言葉を遮ることなく話を合わせる。

佐藤 ははは、そっかあ、静江さんも色々大変だったんですね。  
静江 まあな。

静江、満足そうにうなづく。

静江 そや、佐藤ちゃん晩御飯食べていき。今日鍋するから。

佐藤 えっ、いいんですか？ じゃあ、僕手伝いますよ。買いだしてもなんでも。

凜子 え？

ついていけない凜子。

静江 凜子、あれ佐藤ちゃんに飲ましたって。

凜子 あれって？

静江 あれは、あれやんか。

佐藤 野菜ジュース。

佐藤、テレビ番組でよく観る、早押しクイズの回答者みたいな勢いで会話に加わる。

凜子、驚く。

知ってたん？ という顔で佐藤を見る。

佐藤 静江さんに教えてもらいました。

佐藤、答える。

面白くない様子の凜子。

大笑いする静江。

静江 そやそや、野菜ジュース。凜子、あれ佐藤ちゃんに出したって。

間。

静江 (佐藤に) うちに来たら毎日飲んでもらうでえ。身体にいいからな。

佐藤、背筋を伸ばし、

佐藤 はい。

佐藤、静江、満面の笑み。

静江 遠慮しなや。あんたはもう、うちの家族みたいなもんなんやから。  
佐藤 ありがとうございます。静江さん、最高。

佐藤、静江をハグする。

続いて、凜子の手を強く握る。

佐藤 お世話になります。

びくつとする、凜子。

平静を装い。

凜子 言うとかくけどこれ野菜ジュースちゃうから、スムージーって言うんやからね、今は。

静江、佐藤、怪訝そうに凜子の顔を見る。

間。

半年後。

凜子、静江を車椅子に乗せて家の近所を散歩中。  
立ち止まり。

凜子 苦しくない？ お母さん。

静江、うなづく。

マスクのゴムを何度も触る。

凜子、静江の手を握る。

凜子 あかんよ、これは取ったらあかんやつ。

静江、首を振る。

凜子 我慢してな。

静江 ……。

凜子 熱出たら嫌やろ。

静江 嫌。

凜子 佐藤ちゃんに会えへんようになるもんな。

静江 佐藤ちゃん、嫌。

凜子 わかるけど、もうどないしようもない。

静江、うつむく。

凜子 そろそろあの人、帰って来る頃やな。

静江 野菜ジュース。

凜子 そうそう、嫌いな野菜ばかり詰め込んで作った濃いのを、目一杯飲まして……。

凜子 って、今さら。

凜子、溜息。

回想。三カ月前。

静江の家。

町内放送。

五時きっかりに交響曲。

凜子 ええ、もう五時？ なんでもう、ちようどの時に。

凜子、観ていたテレビのボリュームを上げる。

隣に静江、車椅子に座っている。

テレビ「感染症拡大に伴う倒産、失業者の数は増加の一途をたどり……続きまして、高病原性鳥インフルエンザが日本各地で確認されている問題について、厚生労働省は養鶏場などで殺処分された数は過去最大規模と発表。鳥から人への感染はしないとの見解はそのままですが、海外での感染例もあり変異株の可能性がないか調べる方針を……。」

凜子 お母さん、また鳥やて。

静江 ……。

凜子 感染例ありかあ、

凜子 難儀やなあ。

静江、落ち着かない様子でもじもじしている。

凜子、振り向いて。

凜子 どうしたん、母さん、おしっこ？

静江、首を振る。

凜子 そう。

凜子、視線を外す。

静江、一瞬の隙をつき、履いているおむつの中に手を突っ込む。

小さな塊を取り出す。

静江 はい。

静江 凜ちゃんは、おりこうさんやから。

静江、にこにこしながらそれを凜子の髪に撫でつける。

静江 可愛い。

凜子 ひいーっ、何すんのよ。

凜子の悲鳴。静江、共鳴するように、

静江 わああーっ。お母さん、お母さん。

凜子 ごめん、お母さん、ごめん。怖くない、怖くない、怖くないからね。

凜子、静江をなだめようと、抱きしめる。

回想。

翌週。

いつも通り。午後五時きっかりに、町内放送。

交響曲が流れる。

凜子、探し物をしている。

凜子 おかしいなあ。

引き出しから、鞆、棚、冷蔵庫の扉まで開け閉めして確認。

凜子 ない、ない。

凜子 ないわ。

凜子 お母さん、ちよっとごめん。

凜子、ベッドの下を探ろうとして、横たわっている静江に触る。

静江 痛っ。

身体をこわばらせる静江。

凜子 えっ。

凜子、飛び退く。

凜子 痛いって、どこ？

静江、腕を指さす。

凜子、静江の袖をめくる。

内出血。

凜子 どうしたん、これ。

静江 ……。

凜子 どこで？ トイレ、お風呂場？

静江 トイレ。

凜子 一人では行かれへんのに？

静江 佐藤ちゃん。

凜子 あの人が？ なんで？

静江 抱っこして、おしっこ。

凜子 トイレ介助のこと？ 同性やないからせんでいいって、

凜子 力仕事だけでええからって、あれだけ、

凜子、憎々しげに。

凜子 普通、言うやろ、てか、言わなあかんやん。介護途中でぶつけたんなら、真っ先に、私に。

凜子 お母さんもやで、なんですぐに言わへんの？

静江 ……。

凜子、ベッド下に落ちていたがま口を拾う。

凜子 どういうこと？ なんでこんなところに落ちてるん？ (がま口に) 入れといた万

お金、万札は？ どうしたん？ 取り分けといたお金も、封筒ごと全然見当たれへん。

静江 あそこ？

静江、指さす。

凜子 そうそう、その引き出し。って、お母さん知ってたん？

静江 ふふん。

静江、得意げに。

凜子 って、得意がってる場合やないから。

凜子 どういうこと、佐藤ちゃん、何か言うてた？

静江 ちようだいって。

凜子 はあ？

静江 痛くする？ しない？ って。

凜子 佐藤ちゃんそんなこと言うたん？

凜子 もしかして、その痣。

静江、首を振るが。

凜子 信じられへん、そんなん警察レベルの話やんか。

物音。

背後に佐藤。

凜子 ちよつと。

痣になった静江の腕を見せ。

凜子 これ、どういうことか説明して。お金のことも。

凜子 狙ってたん？ はじめから？

佐藤、近づいてくる。

佐藤 違いますよ。静江さんが言ってくれたんです。くれるって、僕に。

凜子 あげのお金なんかない。あつても、あんたなんかに渡すわけない。

佐藤 わかってないなあ。

凜子 こっち来んな。

凜子、佐藤向かって身近にあるものを次々、投げる。

凜子 来るなって、言うてるやろ。

佐藤 逆らつても、無駄ですよ。でないと、

佐藤、静江に向かって、手を挙げるふり。

凜子 お母さん。

凜子、静江を庇うようにして覆いかぶさる。  
交響曲が響く。

迫る闇。

ドン、ドンと数回鈍い音。

重なるように凜子の声。

凜子 痛い、痛い。うつ、誰か、助けて。

静江 凜…。

凜子 大丈夫、…大丈夫、大丈夫やから…お母さん。

静寂。

締め切られた部屋。

灼熱地獄。

ベッドに寄りかかったまま、眠っているように見える凜子。

静江、やっこのことで起き上がり、よたよたと近づく。

手には、自分のタオルケット。

眠っている凜子の肩にそっと掛け、頭を撫でる。

力尽き、その場に倒れ込む。

数日後。

近所から漏れてくるテレビの音。

テレビ 「自宅の一軒家にて遺体で発見された二人の女性は親子で、熱中症による死亡だったことがわかりました。他に、複数の打撲痕が見つかったことから、誰かから暴行受けた後、長時間放置された可能性があると見て捜査を続けています。また、前日の夕方、複数回大きな物音がしたとの近所の人からの証言もあり、数か月前からこの家に頻繁に出入りし、事件後行方がわからなくなっている元介護職員の男が、何らかの情報を知っているらとみて、その行方を…」

一年後。

静江の家付近。

解体工事中。

凜子、車椅子に乗る静江に向かって。

凜子 ヤッホー。お母さん、元気ですか、どうぞ。

静江 元気です、どうぞ。

静江 あっ。

静江、空を見上げる。

静江 鳥来た。

凜子 お母さん、あれは燕。

静江 燕。

静江、鳥を指さす。

凜子 夏かあ。

凜子、貼り紙がめくれていることに気づき、近づく。  
撫でつけて直そうとする。

「取り壊し注意」と書かれた文字。

そのすぐ下に置かれた花束に目を止める。

凜子、目をつむり手を合わせる。

凜子 タケくん、来てくれてありがとう。綺麗なお花もありがとう。

間。

静江 もう、そろそろ。

凜子 うん。

静江、うなづく。

凜子、車椅子を押し、先に進む。鼻歌で交響曲。

しばらくして、静江。

静江 ちよっと。

凜子 え。

静江 縁起悪い？ その曲。

凜子 気になる？

静江 気になるほどやないけど。

凜子 そんなら、ええやん。

間。

凜子 見たよ、あれ。

静江 え。

凜子 一瞬だけやったけど、鳥が見えた。その後、お父さんも。

静江 そう。

凜子 あの時の話、ほんまやってんな。

静江 嘘や思ってたん？

凜子 そういうわけやないけど。

間。

凜子 このへんで、どう？

二人、立ち止まる。近くで川が流れている。

静江、車椅子から降り立ち上がる。

凜子 ええとこ。

静江 うん。

凜子 辿っていったら海が見える、はず。

静江 そう。

凜子 なんかスースーしてきた。ここちよつと寒いかも。

静江 歩いてるうちに……ほら、こっちは時間経つの早いから。

凜子 そっか。

静江 お疲れ様。

静江、立ち上がる。

凜子に向けて手を差し出す。

『スムージーよ、永遠に』

静江 交代。

若かりし頃の静江。

凜子は小学四年生。

二人、手を繋ぎ、歩き出す。

凜子 どこ行く？

静江 どこ行く。

凜子 動物園。

静江 ええなあ。

凜子 遊園地。

静江 それもええなあ。

凜子 決まらへんやん。

静江 どっちも行ったらええやんか。

凜子 そうなん？

静江 うん。

凜子 ええのん？

静江 そりゃええよ、お母さんと一緒やねんから。

凜子 あ。

凜子、しやがみこんで。

凜子 見て、ぺんぺん草。

静江 ほんま。

凜子 私、この草好き。お母さんは？

静江、微笑んでみせる。

静江 はずな。

凜子 はずな？

静江 この草のもう一つの名前。

凜子 小さいハートがいつぱい。

静江 うん。

凜子 でも、もう食べたらかん。

静江 え。

凜子 まずい。可愛いけど。

静江 そりゃそうや、七草粥、あと天ぷらとかおひたし、でも、生はあかん。  
凜子 へー。

間。

凜子 あ、野菜ジュース作らな。

静江 学習しましたか。

凜子 帰って作る？

静江 うん。でも、もうちょっと。見たいもんあるし。

凜子 何？

静江 さて、なんででしょう？

凜子 クイズ？

間。

凜子 何？ わからへん。

静江 凜ちゃんが見たいもの。

凜子 それやったら、いっぱい。

静江、繋いだ手を大きく前後に振る。

凜子、止まって、静江に耳打ちする。

静江、笑う。

静江 行く？

凜子 うん、行く、行く。

静江 ずーっと？

凜子 うん。ずっと、ずっと、ずーっと先に。

凜子、静江、顔を見合わせて、笑う。

二人、静かに去ってゆく。